室伏鴻プロデュースによる

〈外〉の千夜一夜

〈外〉の千夜一夜 2013.11.19tue.-24sun. 横浜赤レンガ倉庫

Performanceの千夜一夜

会場：横浜赤レンガ倉庫1号館3Fホール／前売2,500円 / 当日3,000円 / 早割り 2000円 (10/31まで)

室伏鴻・新作ソロ『リトルネロ－外の人、他のもの』23日(土) 17:00開場 17:30開演

2013年　ImPulsTanz International Dance Festival レジデンシー作品：『Ritournelle』、日本初演　構成・振付・ダンス：室伏鴻　『渡すコトバ：ryu流産すること。ko子どもたちが生きていればもうあなたとおんなじ歳まわりだ。
わたしはその死児たちの名を踊る。1）それは雲。あるいは「オルガンと硫酸」。2）それは銀。いくらでも際で、縁でふるえていた。「Edge」。3）それは「しとね」という。女たちの短くなった足も男の曲がりなくなった歪んだ膝も…みな水滴で濡れている。
そしてまるで矛盾するようだが、砂漠のように乾いている。それらは干からびてゆく。「音楽」を聴かせたいのはやまやまだ。死んだ貝殻のように硬くなったかれらの耳の奥へ、浸透する、透明なしずくみたいなノイズを。
しかしすべては場所を見てからだ。そこにたたずみ…いっしょに探しはじめるまで、わたしはまったく何十年ぶりかで乗る新幹線の音に身をまかせているだろう。』
その書いて踊ってから奇数な13年が過ぎ…奇妙な旅がつづきわたしは何度でもくりかえし、わたしを外へと放逐する。〈外のリトルネロ〉だ。

大谷能生×室伏鴻『縁てFunk、水際にBlues』21日(木) 19:00開場 19:30開演

音楽ライヴ：大谷能生　ダンス：室伏鴻　Smacでの『即興二番』、吾妻橋DXでの『痙攣的』につづいて三度目の共演。二人の本格的な激突は、縁てFunk、水際にBluesをよびこんで、際立つContortion !!!

芥正彦×室伏鴻『アルトー二人』22日(金) 20:10開場 20:20開演

ディレクション・構成・振付：室伏鴻　出演：芥正彦、室伏鴻　フィルム撮影：鈴木章浩　日本演劇界とダンス界の「絶対的他者」二人、芥正彦と室伏鴻。
同時代に生きながら、すれ違い、続けた二人の、アントナン・アルトーによる磁力の初顔合わせ…
首から注射器をぶらさげて　供犠の釘を自ら己の身体に打ち込むみたいにして、アルトーの亡霊も　この傍らに立っている。タラウマラの　非キリスト教の　魔術的言語によって彼の言語にさらに亀裂を走らせるために。
――アルトーの〈戦い〉への共感とともに　私は踊り始めた　私のミイラの踊りもまた　私の身体と言語の　裂け目をえぐり、むき出しにしてみることだった。死と生の境い目で　踊ることからはぐれてしまった身体の踊りを　発明する事だって＊＊＊(室伏鴻)

『The Last News』24日(日) 17:00開場 17:30開演

振付・構成・演出：室伏鴻　振付助手：ホルヘ・ベルナール、マキシモ・カストロ　照明デザイン：室伏鴻　出演：ホルヘ・ベルナル、マキシモ・カストロ、アレハンドロ・ラディノ、ブレンダ・ボロ、田中美沙子、関かおり
2011年、文化庁助成国際共同制作プロジェクトとしてコロンビアで制作され、各地で高い評価を得た「The Last News」のJapan Version。新作です !!
コロンビアのボゴタのダンサーたちと〈名のない死体たち〉の踊りを考えながら、陽水の歌を聴いていた。「最後のニュース」で踊ることにした。〈機関銃の弾を体中に巻いて　ケモノ達の中で誰に手紙を書いているの
眠りかけた男達の夢の外で　目覚めかけた女達は何を夢見るの　原子力と水と石油達のために　私達は何をしてあげられるの　今　あなたにGood-Night　ただ　あなたにGood-Bye〉（井上陽水『最後のニュース』）

『墓場で踊られる熱狂的なダンス』「瞬間の学校」のための新作　19日(火) 19:00開場 19:30開演

出演：岩渕貞太、山田有浩、中村蓉、堀菜穂、藤由智子　　振付：室伏鴻　〈…一切の語が途絶える時、「雷撃のごとき瞬間」として、「稲妻のごとききらめき」として、自ら現存させる語だ。
（「それらがエーテルで出来たようなある透明さの上で一輪の速やかな花の中で輝き、死に絶える瞬間」マラルメ『芝居鉛筆書き』）〉 －モーリス・ブランショ『文学空間』
あらためて、舞踏の核心にあるものについて語りたいと思う。否、語ることの不可能なもの、不可能な体験について語りたいと思う。思考すると同時に、私の思考をその足元から浸蝕し、崩壊させてしまうものについて。
私の根源にあって、たえず私というものを活気づけている、あの〈空虚〉＝〈無関心〉について。
あなたは、あなたの沈黙について、沈黙とともに語りはじめる。黒く焼けただれたあなたの死体について、音を消失したあの炸裂について。
私は、ヒロシマの体験を持つことが出来ない。それは、すべての他の、外の体験だからだ。しかし私は、私のヒロシマの体験を語りつづけるだろう。
始まりもなく終わりもなく、すでにいつも、私の核心にあるその〈無＝経験の外〉について、あの影と闇の光の力を借りて。

『Free Session』20日(水)、21日(木)、22日(金) 17:15開場 17:30開演、24日(日) 14:30開演

出演：岩渕貞太、中村蓉、藤由智子、堀菜穂、山田有浩、田中美沙子、関かおり、アレハンドロ・ラディノ、マキシモ・カストロ、ホルヘ・ベルナル、ブレンダ・ボロ、コーランタン、による　4日間のフリーセッション。*詳細はHPにて発表

『DEAD1』(振付：室伏鴻) ＋『Still』(目黒大路ソロ)　20日(水) 18:45開場 19:00開演

出演：ホルヘ・ベルナル, アレハンドロ・ラディノ,マキシモ・カストロ / 目黒大路　　「逆立ちして踊れ」といったのは　ニーチェである。　世界で踊られた、室伏鴻振付作品の代表作！

音楽の千夜一夜

会場：横浜赤レンガ倉庫1号館３Ｆホール　チケット（ドリンク付）　前売り券、当日券 1500円

呑むズ　ライブ　23日(土) 20:30開場 20:40開演

演奏：美川俊治(Electoronics,Voice)、HIKO (Drums)、大谷能生(Sax)　2012年結成の”呑むズ”の、エッジを駆け抜ける衝撃のライブ！！！

映像+トークの千夜一夜

会場：横浜赤レンガ倉庫1号館３Ｆホワイエ　前売, 当日共通 800円

石井達朗の一夜『マヤ・デレンの白昼夢』22日(金) 18:30開場 18:40開演

トーク：石井達朗　映像：マヤ・デレン「午後の網目」他　代表作「午後の網目」で知られるマヤ・デレン(1917-61) は、実験映画の女神と言われている。しかしそれは夫であるハミッドとの合作である。
デレンの個性は『午後の網目』を含めて、それ以外のエネルギッシュな活動のなかに焼き付けられている。デレンは、ハイチのヴードゥーを信仰し、研究し、記録することに生涯をかけて執念を燃やし、そして、『午後の網目』以降の実験映画の自由な創作においては、
さらに深い領域に足を踏み入れている。ダンス、トランス、憑依、フェミニズム、ジェンダー、シュールレアリズムの観点から論じられるデレンの映像群。その色褪せないサイレンスの世界に今、向きあう。

大谷能生＆木村覚の一夜『映像化されたダンスからあたらしいダンスを開発する方法』20日(水) 20:00開場 20:10開演

出席者：木村覚、大谷能生、室伏鴻　：PC上に「踊ってみた」投稿映像が溢れ、ヴォーカロイドはヴァーチャルな身体を与えられてモニター上でゆらゆらと踊りを踊る。
二〇世紀のダンサーたちは、「映像化」された自分たちの身体・振り付け・ダンスと、必ずしも親しい関係を結んでは来なかったが、見る／見られるという欲望が液晶の平面上であらたな乱反射をおこしている現在、
ダンスへの衝動は「映像」とどのように切り結ぶことが出来るのか。古典からニコ動まで古今のダンス映像をサンプルしながら、「ダンス」と「映像」、その両面のエッジを探る試み

室伏鴻
もろぶし・こう
1947（昭和22）東京生まれ。1969年土方舞に師事。72年「大駱駝艦・天賦典式」の創立旅揚げに参加。以後数多くの名舞台を踏む。76年舞踊派「背火」を主宰。78年自らプロデュースする「アリアドーネの会」と共に、パリで「最期の楽園－彼方の門－」を公演。舞踏が世界のButohとして認知される端緒をひらく。86年パリ・ユネスコ本部にてKo Murobushi Company『Pantha Rhei』を上演。2000年大阪トリイホールで『外の人、他のもの』、神楽坂Die Pratzeで『Edge』。03年アスベスト館で『即興三夜』、Ko& Edge Co.『美貌の青空』、以後、ソロで『quick silver』（舞踊批評家協会賞）、Ko & Edge Co.で『Heels』、『始原兄』、『D殿』、バルタバスとの『ケンタウルスとアニマル』、振付に『春の祭典』『Un Coup de Dou』など。

目黒大路
めぐろ・だいじ
2001年、アスベスト館に入館。元藤爆子に師事。2002年、『JADE 2002 INTERNATIONAL DANCE FESTIVAL 土方メモリアル』にて、元藤爆子・大野慶人とのトリオ作品「大強」で注目を集める。2003年～2010年、室伏鴻のユニットKo&Edge Co.に参加し、世界14カ国、29都市で作品を発表。2004年、自身のカンパニーNUDE を立ち上げる。平成22年度 文化庁新進芸術家海外研修派遣制度研修員。

岩渕貞太
いわぶち・ていた
振付家・ダンサー。玉川大学芸術学科にて演劇を専攻、演劇と並行して日本舞踊・舞踏などを学ぶ。ダンサーとしてAPE・エプロール・伊藤キム＋輝く未来・Co.山田うん・Ko & Edge.Coなどに参加。2005年より、「身体の構造」や「空間や音楽と身体の相互作用」に着目した振付作品を発表する。劇場での公演以外にも美術館でのパフォーマンスやワークショップの開催など、多方面で活躍している。関かおりとの共同振付作品『Hetero』で、横浜ダンスコレクションEX2012 「若手振付家のための在日フランス大使館賞」を受賞。2013年度セゾン文化財団シニア・フェロー。

Jorge Bernal
ホルヘ・ベルナル
コロンビアのDistrita Francisco José de Caldas 大学で演劇とコンテンポラリーダンスを学ぶ。卒業後ダンスシアターをCuca Taburelli(アルゼンチン)に、コンテンポラリーダンス、及び舞踏を室伏鴻(日本)、Ximena Garnica (コロンビア)、Mauliclo Cetedon (チリ)、Raphaelle Giraldo (コロンビア)、デニス藤原(カナダ)各氏に学ぶ。2011年室伏鴻との共同制作に参加。" The Last News" の振付の一部を担当。ダンスカンパニーTREVIUS y MALDITA DANZA主宰。今コロンビアで最も注目を浴びる若手舞踊家のひとりである。

Maximo Castro
マキシモ・カストロ
語り部演劇のディレクター、プレイヤー、フィジカルシアター及び演劇人類学のアクター、ダンサー、人形師、画家等、多くの顔をもつマルチアーティストである。劇場、野外を問わず多くの公演を行い、又人権ONG会議をはじめ、多くのフェスティバルからの招待を受けて活発な活動を展開している。2013年コロンビア共和国の奨学生としてCNDCアンジェ（仏）、ImPulsTanz(ウィーン)における室伏鴻氏WSに参加。

Alejandro Rodrigues
アレハンドロ・ロドリゲス
コロンビアナショナル大学にて哲学及び文学を専攻。ダンスカンパニーTREVIUS y MALDITA DANZAのメンバーとして、多くの公演に出演。2011、室伏鴻との国際共同制作" The Last News"のクリエーションに参加する。ボゴタ芸術家協会会員。コロンビアナショナル大学では多くの論文を発表。研究紙などに多数掲載される。

関かおり
せきかおり
川越市出身。2003年より自作の発表を開始。08年ソロ作品『ゆきちゃん』でSTスポット「ラボアワード」を受賞。
独特の舞踊言語と繊細な感性とを持ち合わせ、12年には横浜ダンスコレクションEX2012にて「若手振付家のための在日フランス大使館賞」（鈴鹿貞太との共作）、トヨタコレオグラフィアワード2012にて「次代を担う振付家賞」を受賞する。13年、昆布主史作・演出「ちかいくらやみ～天狗史幻譚～」にて振付を担当。近年は香りを取り入れた作品に挑戦している。

鈴木創士
すずき・そうし
作家、フランス文学者。音楽ユニットEP-4のメンバーでもある。キーボード奏者。著書に『サブ・ローザ　吉物不良統義』(現代思潮新社)、『ひとりっきりの戦争機械』(青土社)、『中島らも烈伝』(河出書房新社)、『アントナン・アルトーの帰還』（現代思潮新社）、他。ランボー、ジュネ、アルトー、ソレルス、ジャベス他の訳書がある。

芥正彦
あくた・まさひこ
'46年生まれ。67年、『太平洋戦争なんて知らないよ！』で鮮烈にデビュー。「彗星のように(寺山修司)」、「危険な男（土方巽）」、「砂漠の住人（三島由紀夫）」と言われ、その時代の先端を走り抜けた。
'78年、天皇劇上演により右翼と衝突。舞踏オペラ『浄められた夜』『ロマノフの海』『リボン、惑星、涙の木』『惜しみなく愛は奪よ』、アルトーでは『ヴァン・ゴッホ』『吸と肛門』『アルトー　ルモキ　ここに眠る』『アルトー 24時（人形劇）』がある。
12月7、8日室伏鴻と『ヘリオガバルス』共演予定。

宇野邦一
うのくにいち
1948年松江市生まれ。フランス文学者・批評家・立教大学映像身体学科教授。身体論、身体哲学を焦点としながら近年はイメージ論、時間論にかかわるエセーを書き続けている。著書に『アルトー　思考と身体』(白水社)、『ジャン・ジュネ－身振りと内在平面』(以文社)、『映像身体論』、『吉本隆明　煉獄の作法』(みすず書房)、訳書にドゥルーズ『フーコー』、『襞』(河出書房新社)、ドゥルーズ／ガタリ『アンチ・オイディプス』、アルトー『神の裁きと訣別するため』(河出文庫)、ベケット『伴侶』、『見ちがい、言いちがい』(青土社)などがある

鵜飼 哲
うかい・さとし
1955年東京都に生まれる。京都大学大学院文学研究科卒業、フランス文学・思想専攻。現在、一橋大学大学院言語社会研究科教授。著書に『抵抗への招待』(みすず書房、1997)『償いのアルケオロジー』(河出書房新社、1997)『応答する力』(青土社、2003)『主権のかなたで』(岩波書店、2008) ほか、訳書にジュネ『恋する囚』(共訳、人文書院、1994)、『アルベルト・ジャコメッティのアトリエ』(現代企画室、1998)、デリダ『盲者の記憶』(みすず書房、1998)『友愛のポリティクス』(共訳、みすず書房、2003)『ならず者たち』(共訳、みすず書房、2009) などがある。

鴻 英良
おおとり・ひでなが
1948年、静岡県生まれ。東京工業大学理工学部卒。演劇批評、ロシア芸術思想。ウォーカー・アート・センター・グローバル委員（ミネアポリス）、国際演劇祭ラオコオン芸術監督（カンブナーゲル、ハンブルク）、舞台芸術研究センター副所長（京都）などを歴任。著書に『二十世紀劇場――歴史としての芸術と世界』（朝日新聞社、1998）、訳書に、タルコフスキー『映像のポエジア――刻印された時間』(キネマ旬報社)、カントール『芸術家よ、くたばれ！』(作品社、1990)、共著に『野村雅一　赤鬼の挑戦』(青土社、2006)、『反響マシーン――リチャード・フォアマンの世界』(勁草書房、2000) などがある。

室伏鴻プロデュース公演 2013 Performance 千夜一夜 / 音楽 千夜一夜 / 映像+トーク 千夜一夜
〈外〉の千夜一夜 2013.11.19tue.-24sun. 横浜赤レンガ倉庫

吾妻橋3階 ダンスクロッシング

〈外〉の千夜一夜

桜井圭介&三田格の一夜『デモンストレーションとしての「表現」』23日(土) 18:30開場 19:00開演

デモは表現たりうるか?そして、表現は示威行為たりうるか?今われわれに可能な行為を探る。「桜井の闘いは、彼のグルーヴィな瞬間を死守する闘いに他ならない」(木村覚)

宇野邦一の一夜『リトルネロと外の身体』24日(日) 15:00開場 15:15開演

「発狂した時間とは、神が時間に与えた曲線の外に出て、おのれの内容をつくってくれたもろもろの出来事から解放され、おのれと運動との関係を覆してしまうような、そうした時間であって、
要するにおのれを空虚で純粋な形式として発見する時間なのである」(ドゥルーズ『差異と反復』) …宇野邦一の話を じっくり聞いてみたい…もっともっと聞いてみたい…リトルネロ 純粋な形式とはなにか?

鴻英良&鵜飼哲の一夜『棄民 国民 そして 忘却』23日(土) 14:15開場 14:45開演

『二十世紀劇場』(鴻英良)と『抵抗への招待』(鵜飼哲)の著者による対話。〈時間そして/または空間の極限的な縮減。時間上そして/または空間上の限界、主権という奇妙な権利はつねにそのような〈場〉に姿を現す。〉
『ヒロシマ、モナムール』『石の賛美歌』の再上映を手がかりに〈抵抗とはなにか〉について砲弾の放談だ。

鈴木創士&丹生谷貴志の一夜『裏返し・踏み外しのダンス放談』24日(日) 12:30開場 13:00開演

縁 Edgeは、舞踏と非舞踏をつないでいるのか?それは言葉や叫びにも介在するものなのか?境界の上で、肉体は肉体を煙に巻いている。舞踏は踊らない肉体、丸太のような体を妹としているではないか。
舞踏が肉体の井戸のなかへ降りていくことだとすれば、この井戸はどこに通じているのか? 地獄なのか? 「外」なのか?

写真展示[実験的身体1969〜] 会場:赤レンガ倉庫1号館3階ホワイエ

確かに全ては実験であっただそして今もなお、継続する実験を焼き付ける。1960年代後半から今日に至る Edgeのドキュメント。

映画上映 会場:横浜赤レンガ倉庫1号館3Fホール 前売、当日共通 800円

『石の賛美歌』23日(土) 12:00開場 12:30開演

監督:ミッシェル・クレイフィ
Canticle of the Stones (山形国際ドキュメンタリー映画際 '91特別賞受賞) ベルギー/1990/アラビア語/カラー/35mm (1.66)/105分/日本語字幕あり (映像提供:山形国際ドキュメンタリー映画際)
イスラエルの街を舞台としたこの作品は、その土地に切り放すことができないアイデンティティを持つたパレスチナ人の日常生活の緊張、生きている場所そのものが闘争の場であり、
自国にいながら亡命者の立場を強いられる彼らの苦悩、そして その中に恋人たちの再会という愛の物語を並置して、魅力的でいいようのない存在感をもつものとなっている。

「ヒロシマ・モナムール」20日(水) 12:00開場 12:30開演

監督:アラン・レネ 脚本:マルグリト・デュラス 日仏合作映画 / 1959 / 日本語字幕あり マルグリット・デュラスによるテクストとアラン・レネによるイマージュ二人のコラボレーションが生んだ、至上の映像詩。
「きみはヒロシマで何も見なかった。何も。 私はすべてを見たの。すべてを。あなたは私を殺すのよ。あなたは私に幸福をあたえるわ。私には時間があるの。おねがい。
私を食べつくして。私の形を、醜くなるまで、変えてしまって。」(マルグリット・デュラス「ヒロシマ、私の恋人」 翻訳:清岡卓行)

「裁かるるジャンヌ」22日(金) 12:00開場 12:30開演

監督:カール・テオドア・ドライヤー フランス / 1928 / サイレント オルレアンの少女、ジャンヌ・ダルクの奇跡と宗教裁判を扱った、無声映画の至高の作品として位置づけられている。
場面はオルレアンの少女の裁判の法廷と処刑のいわゆる「受難」にのみ限られ、しかも画面は大写しの連続で終始する。その多様なカメラ・アングルは見る者を圧倒し、サイレント末期を飾る傑作の一つと評価される。

踊る少女は外へ!!

公演 前売 2,500円 / 当日 3,000円 / 早割り 2,000円(10/31まで)
映像+トーク 前売、当日共通 800円
映画 前売、当日共通 800円
ライブ 前売、当日共通 1,500円
通し券 *土曜は一日赤レンガ(通し券) 前売、当日共通 4,000円
*日曜は一日赤レンガ(通し券) 前売、当日共通 3,000円
*6日間毎日赤レンガ(全プログラム通し券) 10,000円

チケット取り扱い
■カンフェティ http://confetti-web.com/ 0120-240-540 (平日10:00〜18:00)
■JCDNダンスリザーブ http://dance.jcdn.org/
■横浜赤レンガ倉庫1号館 045-211-1515 (10:00〜18:00)
お問合せ:080-5538-6407 / k_kunst_watanabe@yahoo.co.jp (渡辺)
045-211-1515 / 横浜赤レンガ倉庫1号館(10:00〜18:00)

企画制作:Ko&Edge Co. / k-kunst
共催:横浜赤レンガ倉庫1号館 ((公財)横浜市芸術文化振興財団)
助成:公益財団法人セゾン文化財団 / 先駆的芸術活動支援助成(アーツコミッション・ヨコハマ)
協力:在日本コロンビア共和国大使館 東京セルバンテス文化センター STスポット横浜
吾妻橋ダンスクロッシング 島の劇場 (有) エス・アイ・ジー 山形国際ドキュメンタリー映画際
テルプシコール 慶応義塾大学アート・センター (土方巽アーカイヴ)
Manusdea Antropolia Escenica 川口隆夫
舞台監督:原口佳子(モリブデン) / 照明:丸山武彦 / 音響:高橋英由生
アートディレクション&デザイン:加藤賢策(LABORATORIES)
プログラムは変更になる場合がございます。HPをご確認くださいませ
〈外〉の千夜一夜 公式HP http://outside-1001.org/

ARTS COMMISSION YOKOHAMA 公益財団法人セゾン文化財団 Instituto Cervantes

Brenda polo
ブレンダ・ポロ
演劇人類学インターナショナルスクール(ISTA)参加、ニューデリージャワハルラル大学に留学(2003)、コルカタブックフェア議長(2004)、またメモリーリサーチセンターにおいて女優、振付家、ダンサーとして活動(1996-2006)、ハベリアナ大学教授(2001-2005)等々数々の経験を経て、現在は Manusdea Scenic Anthropologyのディレクターとして、またボゴタ芸術アカデミー教授として障害を持つ若者たちの指導に力を注ぐ。

山田有浩
やまだ・ありひろ
1983年鹿児島生まれ。幼少より音楽に触れ、2006年より金属打楽器、水、石、布、糸、テープレコーダー等を駆使した即興演奏と身体と空間と記憶を関心の中心として展開。2012年より舞踏に転向するとともに、舞台音楽制作も行う。原始感覚美術祭(2010)参加、大野一雄舞踏研究所にてドミニクB.Bと共演(2012)。吾妻橋ダンスクロッシング 宝状鴎振付「痙攣」参加など。趣味は掃めくり、好きな食べ物はひじき。

中村蓉
なかむら・よう
早稲田大学モダンダンスクラブにてコンテンポラリーダンスを始める。2009年より小野寺修二、近藤良平、両氏の振付作品に出演、アシスタントを務める。『音楽劇 トリツカレ男』、ダンストリエンナーレトーキョー2012『恋のバカンス』等に出演。演劇の振付・ステージングも担当。舞台以外にも鄉ひろみ「笑顔にカンパイ!』MV鄉ひろこ役、等に出演。2012年、ダンスコンテスト NEXTREAM21審査員特別賞、第1回セッションベスト賞 2013年、横浜ダンスコレクションEX審査員賞・シビウ国際演劇祭賞を受賞。

藤由智子
ふじよし・ともこ
日本女子体育大学 舞踊学専攻卒。インプロビゼーションを軸に音楽家や美術家とのセッションを重ねる。自らの企画として『Dance×Music』などの企画や、ギャラリー、都内ライブハウスなどで精力的に活動している。ダンサー菊地美佐子主宰のフィメイルパフォーマンスユニットmujerでは、踊り、シンセサイザー、鳴り物を担当。

堀菜穂
ほり・なほ
1988年生まれ、神戸出身。10歳よりジャズダンスを始める。その後、お茶の水女子大学舞踊教育学コースにてコンテンポラリーダンスを始める。高野美和子の舞台出演をきっかけに、伊東歌織等若手振付家の作品に多数出演。2012年にはセッションハウスで行われた近藤良平のトサカ計画に参加。また、自身の作品も不定期で創作し、2013年、横浜ダンスコンペティション新人振付家部門にソロ作品で出場。

田中美沙子
たなか・みさこ
10歳よりバレエを初める。ヨーロッパで研鑽を積み、フランスCannes Jeune Balletを経て、2005年帰国。黒田育世率いるBATIKの主要メンバーとして、国内外多数のフェスティバルに参加。近年より自身の創作活動を本格化し、ソロ作品を発表。バレエで培われた身体性をもとに、繊細かつダイナミックな振付で、1つのテーマを掘り下げ物語を構築する自身のスタイルを展開している。

Corentin Le Flohic
1983年生れ。レンス大学(フランス)で美術及びビデオ編集、ダンス、パフォーマンスを学ぶ。その後Hallet-Eghayan company、Toulouse's CDC 、CNDC Angers等の様々なコースで学んだ後、Fabienne Compet, Tino Seghal, 室伏鴻/カルロタ池田, Pauline Simon, Dominique Brun, 等のプロジェクトに参加

大谷能生
おおたに・よしお
1972(昭和47)年生まれ。批評家、音楽家。96年、音楽批評誌『Espresso』を立ち上げ。02年まで編集、執筆。日本のインディペンデントな音楽シーンに実践と批評の両面から深く関わる。著書に『持ってゆく歌、置いてゆく歌 不良たちの文学と音楽』(エスクァイアマガジンジャパン)、『散文世界の散漫な散策 二十世紀の批評を読む』(メディア総合研究所)、菊地成孔とのコンビによる講義録に『東京大学のアルバート・アイラー 東大ジャズ講義録』(全2巻・文春文庫)ほか。

石井達朗
いしい・たつろう
舞踊評論家。関心領域は、舞踊および身体文化。とくに、サーカス、アジアの祭祀芸能、脱領域のパフォーマンスなど。2003年カイロ国際実験演劇祭審査員。01年より04年まで朝日舞台芸術賞選考委員。05年韓国ソウルの国立劇場における舞踊フェスティバル実行委員長。06年および08年トヨタコレオグラフィーアワード審査員。著書に『アウラを放つ闇—身体行為のスピリット・ジャーニー』『男装論』『サーカスのフィルモロジー』『アジア、旅と身体のコスモス』『ポリセクシュアル・ラヴ』『アクロバットとダンス』『異装のセクシュアリテ』『身体の臨界点』など。

桜井圭介
さくらい・けいすけ
音楽家・ダンス批評。1960年生まれ。批評活動、そして吾妻橋ダンスクロッシング、清澄白河SNACのキュレーションを始め、さまざまな方法でダンスにかかわり続ける。音楽家としても、遊園地再生事業団、ミクニヤナハラ、ほうほう堂、地点、砂連尾理+寺田みさこ等、舞台作品での協働も多い。著書に『西麻布ダンス教室』『ダンシング・オールナイト』。

丹生谷貴志
にぶや・たかし
東京芸術大学美術学部芸術学科卒業、同大大学院美術研究科西洋美術史修了。神戸市外国語大学外国語学部助教授をへて教授。比較文化論を教えている。文芸評論家、神戸市外国語大学教授。美学、表象論などを専攻。「…」を多用した独特の文体を特徴とする。分析とも感想ともつかない繊細な書き方をする。ジル・ドゥルーズ、フーコー、バルトに大いに親しみ、映画もクリント・イーストウッドをはじめ、大いに愛好する。その愛好ぶりは『ドゥルーズ/映画・フーコー』に詳しい。

三田格
みた・いたる
野田努や、KENGOらとともに日本テクノ黎明期からテクノ音楽批評を行っていた音楽ライター。他に文学・社会批評も行っている。
編集者としての仕事に『香が魂のイロニー—カート・ヴォネガットJrの研究講本』(北宋社刊)やT生郎 景野浩志郎画報』(河出書房新社刊)など。また著書にダークサイドの憂鬱『崩壊家庭』の社会学(宮迫千鶴との共著)ゼロ年代の音楽 壊れた十年(野田努、松村正人、纐纈涼、二木信との共著)TECHNO definitive(野田努との共編著)等がある

木村覚
きむら・さとる
1971年千葉県生まれ。日本女子大学人間社会学部文化学科准教授。専門は美学。artseapeなどで、ダンスを中心とした批評も行う。最近の主な論文に「レディメイドとダンス」(『舞踊学』35号)、レビューにベーコン論(絵画とダンス あるいは複製技術時代の芸術作品』(『現代の眼』600号)など。著書に『未来のダンスを開発する フィジカルアート・セオリー入門』(メディア総合研究所)。

「呑むズ」
美川俊治(Electoronics,Voice)、HIKO(Drums)、大谷能生(Sax)によるトリオ・バンド。二〇一二年末に新大久保Earthdomにて結成。活動中。

http://outside-1001.org/

もし、人間における力が、外の力と関係してはじめて形態を合成することができるなら、いまそれはどんな新しい力と関係する可能性があり、そこから、神でも、人間でもないどんな新しい形態が出てきうるだろうか。ニーチェは「超人」と言いながら、このような問いの状況を正しく示したのである。（ジル・ドゥルーズ『フーコー』）

〈a Double - 映像:〉

1. 背面·背中で、後ろ向きで重なっている二人。

ゆっくり裂けるみたいに離れ二人になって、彷徨うように歩き出す…

2. 顔、顔貌性――顔の引き攣り、それだけ。重なる、溶ける、二つが一つに。

一つが二つに。クローズアップで！！（室伏鴻『映像のために』）

五体が満足でありながら、しかも、不具者でありたい、いっそのこと俺は不具者に生まれついていた方が良かったのだ、という願いを持つようになりますと、ようやく舞踏の第一歩が始まります。びっこになりたいという願望が子供の領域にあるように、舞踏する人の体験の中にもそうした願望が切実なものとしてあります。…（略）

犬に打ち負かされる人間の裸体を私は見ることができます。これはやはり、舞踏の必須科目で、舞踏家は一体何の先祖なのかということにそれはつながってゆきます。…（略）

老婆の初潮のことを考えれば、わたくしは何処へでも行けるであろうと思います。しかし、これらのことは音の絶えた世界の中の出来事として起る現象なのです。こうした眠り菓子のような、ぐにゃぐにゃしたものはやがては堅い凍てついたものの支配下になるのだとわたくしには思えます。そうなってしまった、いわばかじかんで何の祖先かもわからなくなっている遠いわたくしを近くに息づいているこのわたくしは、一個の童貞体として自覚させるでしょう。

そこでわたくしが踊ることは、経験の舞踏化でもなく、ましてや舞踏上の熟練でも既にないのです。尊厳な風景との間にパシッと折れるような緊張関係を持ってただ目を見開いている肉体に、わたくしはなり、いたいと思うのです。その時わたくしは、わたくしの体を見ない方が優れているとは考えません。見てしまったという悔恨もかじかんで不幸な肉の芽を吹き出すことはできません。

舞踏が表現の手段であるところでは、常に嘆願や平伏の姿となっていますし、従順と嫉妬の全音階に基づいて熟い舞踏の形を整えているだけです。これはわたくしにとって余り重要なことではありません。・・・わたくしの舞踏が、当たり外れのないように何の助けを借りねばならぬかはほぼ明瞭しているように思われます。（土方巽『犬の静脈に嫉妬することから』）

「さあ…」

「花火にしては――」

自分は云いつづけた

「あんなにピカピカしていたはずがない」

ポリスと自分とは、五分間ばかし考えこみながら立っていた

「星にしても　花火にしても」

腕時計を見ながらポリスは云った

「この事件はどうも不思議だ」

そこで自分とポリスとは並んで歩き出した

（稲垣足穂『一千一秒物語』）

＊

文学における「文」はあらゆる言葉が陥没してしまった地帯にその場所を持つ、そうブランショは言う。本質的孤独において人は穏やかに交わされていた言葉の領域から脱落し、絶対的な通達不能性、連帯

彼が、もしこのまま地先しか地に触れないとしたなら、この不条理な身ぶりが、彼を離陸させ、地から切り離し、二度と戻ることもできなければ、また何ものも彼をとどめえない星の世界へ、彼を投げあげてしまうはずでした。彼は踵をぴったり地につけて休みました。安心して足に地を踏むためでした。彼にはダンスができました。（ジャン・ジュ刹『花のノートルダム』）

Deep down in Louisiana, close to new Orleans/ Way back up in the woods among the everygreens:/ There stood an old cabin made of earth and wood/ Where lived a country boy named Johnny B. Goode/ Who never ever learned to read or write so well/ But he could play a guitar just like a-ringing' a bell/ Go! Go! Go! Johnny! Go! Go!(Chuck Berry:『Johnny B. Goode』)

わたしの身体のどこかが部分的に弱いということなど、まったく指摘できない。たとえば、胃腸官の故障による胃病は一度も経験しない。もっとも、全身疲労の結果として胃腸系統の極度の衰弱がおこることはあるが、これは話が別である。眼病にしても、盲目になるのではないかと危ぶまれることもしばしばあったが、これも疲労の結果にすぎず、眼の器官に原因があるのではない。だから、生活力が増大するにつれて、視力ももとどおりに増大した。――わたしの場合、病気の回復とは、長い、あまりにも長い歳月の経過を意味する――しかし、残念ながら、回復とは、同時にまた一種のデカダンスの再発、悪化、周期的反復をも意味するのである。こう言ってくれれば、わたしがデカダンスの問題にかけては熟知者であるということを、あらためて言い立てるまでもなかろう。わたしはデカダンスという語のスペルを、前からも後からも一字一字じっくりと練習して学び覚えたのだ。およそ物事を把握し理解することにかけての金銀線細工的な技術、ニュアンスを感じとるあの指、「かくれているところを見抜く」あの心理学、その他わたしの特技とするものは、わたしにおけるすべてが洗練され、全観察器官も観察そのものも洗練されて鋭敏になったあの時期にはじめて習得したものであり、あの時期の因有の贈り物なのである。

病者の光学によってより健康な概念と価値を見わたし、さらにそれとは逆に、豊かな生命の充実と堅固さからデカダンス本能のひそかな作業を見下ろすこと――これこそ、わたしがいちばん年季をいれた修業、わたしにとって真に経験といえる経験であり、もしわたしが何かの道で達人になりえたとするなら、まさにこの道においてなのである。わたしは視点を転換するすべをすっかり身につけており、たくみに行使することができる。（ニーチェ『たの人を見よ』）

いっさいの文章表現は、豚のやるような仕事だ。…文学をやるような連中は、すべて豚野郎だ、特に、近頃の連中はそうである。・・・

私はすでに、こう言ったことがある。私にはもはや自分の言語はない、と。

何ひとつありはしないのだ、ひとつの美しい〈神経の秤〉をのぞいては。（アントナン・アルトー『神経の秤』）

マラルメにおいては、不在は、瞬間の突如性と結ばれている。すべてが再び虚無へと落ち込むとき、一瞬、存在の純粋性が輝くのだ。一瞬、普遍的な不在が、純粋な現存と化する。すべてが消滅する時、消滅そのものが現れる。消滅そのものが、明らかに見てとれる純粋な輝きとなる。闇を通して光が、夜を通して昼があるような、無二の地点となるのだ。リルケにおいては、不在は空間と結ばれている。この空間そのものは、おそらく時間から自由だが、それを強化するゆるやかな変質によって、言わばもうひとつの時間だ。死の時間そのものであるような時間、死の本質であるような時間、われわれの焦立たしく荒々しい せわしさとはまったくちがった時間、何の効用も持たぬポエジーという行為が効用ある行為ともがっているように、ちがっている時間、そういう時間に近づく方法でもある。

この時間においては、われわれは、果てしなきもののうちを移住し、限りない彷徨のうちに停滞していて、おのれ自身の外に、世界の外にとどまらねばならず、言わば、死そのものの外で死なねばならないのだが、リルケは、この時間のなかに、ある至高の可能性を、ある運動さえも、認めようとするのだ、つまり、悲鳴の接近、詩的閃示の接近を認めようとするのだ。つまりそれは、遂に首尾よく結ばれた、開かれた世界との関連だ。「否定のないどこでもないところ」(Nirgends ohne nicht)（第八の悲歌）である空間が断言される。オルフェウス的言葉の開放だ。その時、語るとは、栄光にみもた透明さだ。もはや語るとは、言うことではなく、名づけることでもない。語るとは、讃えることであり、讃えるとは、栄光を讃えることだ、言葉を、もはや語るべき何ものもない・時なおも語る純粋な輝かしい・焼尽と化することだ、名前のないものに名前を与えるものではなく、それを迎え入れ、呼びおこし、讃える、純粋な輝かしい・焼尽と化すことだ。つまりそれは、夜と沈黙とが、砕かれもせずあらわにもされずに明示される、唯一の言語なのだ。（モーリス・ブランショ『文学空間』）

その仕事も一、二年で片付いたので一応郷里へ戻って来た。女房はまるで後家のような生活をしていた。そして今度出ていく時はついていくという。金もおくらず好きな事を仕放題にさせたのではたまらないからである。幸い、山口には仕事があったので、今度は家族をつれて山口へ行った。その間に日清戦争があり、日本は大勝し、台湾を領土にした。一しょに仕事していた仲間が台湾へ行ってみようではないかというので、妻子を郷里へかえし、台湾へわたる事にした。そうして門司から船にのった。乗客は台湾で一族あげようというのもので一ぱいであった。

その頃まで芸人たちは船賃はただであった。そのかわり船の中で芸を見せなければならなかった。昔は遊芸の徒の放漫は実に多かった。それは船がすべてただ乗りできた上に、木賃宿もたいていはただでとめたからである。だからいたって気らくであって、いわゆる食いつめる事はなかったし、まるで多少の遊芸の心得があれば、食いつめたら芸人になればよかった。だから「芸は身を助ける」と言われた。芸さえ知っておれば飢えることもなかった。台湾へわたる船の中でも、そうした芸人たちが歌ったりおどったり手妻（手品）をして見せてくれるので退屈どころか、いつキールンへついたかわからぬほどだった。（宮本常一『忘れられた日本人』）

すなわちこの軽快さは(疲書の)幸福と純潔とを予告するものであり、事実おそらくは隔離された空間での服に見えぬ者をパートナーとするひとつの舞踏、「墓石」との楽しい、熱狂的な舞踏なのである。（モーリス・ブランショ『文学空間』）

cette legerete n'est sans doute pas une vraie legerete, mais elle sans consequences et elle n'est pas sans promesse: elle annonce le bonheur et l'innocence de la lecture, qui est peut-etre en effet une danse avec un partenaire invisible dans un espace separe, une danse joyeuse, eperdue, avec le <tombeau>.

(Maurice Blanchot: L'espace litteraire 1955)

私は金を得るために踊る…。彼女は私が狂っていると考えている――彼女は考えすぎてこの考えを持った。私はほとんど考えない。それで感ずることすべてを理解する。私は肉体によって感じている。知性によってではない。私は肉体である。私は感情である。私は肉体と感情の中に住む神なのだ。

ディアギレフは常に詐術を用いるのだ。彼は誰も自分をわかっていないと考えている。私は彼をわかっている。だから闘牛を彼に申し込むのだ。私は牛だ。傷ついた牛だ。私は牛の中にいる神だ。私はアピスだ。私はエジプト人だ。私はインド人だ。私は赤銅のインディアンだ。私は黒人だ。私は中国人だ。私は日本人だ。私は外国人だ。旅行者なのだ。私は海の鳥だ。私はトルストイの木だ。私はトルストイの根っこだ――トルストイは私自身だ。私は彼だ。（ヴァスラフ・ニジンスキー『手記』）

矢野道子　様

メール拝読。昨日は、お元気そうで、ほんとうに楽しい、最高の一日でした。奈良に感謝です。
千葉のほうにアトリエを移動していらした頃から、なんとかご挨拶に伺いたいと思いながら、果たせずに過ぎてしまったのでした。
（矢野さんには、愛想のない冷たい奴だと思われても仕方ない…。）

思えば、矢野さんなしには、自分の人生はない。同然なのでした。土方巽の『肉体の叛乱』『叛乱』は

不能性の中に陥没する。「文学」における「文」とはまさにその陥没の呟きとも沈黙ともつかない場の中に輪郭のない輪郭(ああ、おフランス!)を見いだすのだ。そして、そうした「文」からなる「文学」とはその通達不能性、連帯不能性を乗り越えて進む営みではなくて、その陥没の中で、その不能性の中で、ただ互いに互いを「信任」すること、それ自体が約束のない陥没であるだろう「信任」に賭けること、その営みである…ブランショならそれを「友愛」と呼ぶことになるだろう。そして、如何なる比喩なしに文字通り「死の空間--本質的孤独」であった独房に隔離され続けていた永田則夫は?

*

例えば村井紀氏が鵜飼哲氏の『抵抗への招待』(みすず書房)への書評の冒頭に「ジャン・ジュネは晩年パレスチナを擁護した」と書くとき(『すばる』97年12月号)、村井氏の文意とは別に、この「擁護した」という言葉が気にかかる。一体如何なるものの権利で作家がパレスチナを「擁護する」ことが出来るだろうか?ジュネにパレスチナについて書くようにと要請した者は、おそらくジュネの「名声」を通して自分たちの存在と行動が明記されることを望んだのだろうし、その程度のことはジュネは十分承知で、結局その要請に応えることは出来なかったのだが、それはともかくとして、作家が出来ることは如何なる意味でも「擁護」ではなく、ジュネ自身書いているように、ただ、具体的な名を持った者たちに対して本質的に無責任な「信任」を書きつけることだけだろう。或いは「信任」の本質的な無責任さを、つまりは約束のない陥没においてしか発信され得ぬものを耐えること、そのことにおいて自らに、責務としては無限に空虚な責務のありかを示しつづけることだけであるだろう。何度読み返しても完全な輪郭とならない、ジュネの追著の、最後の書き込みとも言われる言葉…。

「言葉のありとあらゆるイマージュを守ること、そしてそれを使用すること、何故ならそれらは砂漠の中にあり、そこに探しに行かねばならないから」。

(丹生谷貴志『死者の挨拶で夜がはじまる』－墓石との熱狂的なダンス)

Somebody, Loan me a dime / I need to call my old time used-to-be
Somebody, Loan me a dime / I need to call my old time used-to-be
I know she's a good girl / But at that time I just didn't understand
I know she's a good girl / But at that time I just didn't understand
Oh no I didn't / Somedody loan me a dime....

(Boz Scaggs:『Loan Me A Dime』)

私の上半身は――太陽神経叢より上の部分は――消失し、少なくとも孤立した感覚はもはや引き起こさなかった。ただ両脚だけが、私が成ったものを床に据えつけつつ直立していて、それ以前の私のありようとの絆を保っていた。その余の部分は、炎上する、それ自身の痙攣の、過度な、自由でさえある ほどばしりであった。舞踏の性格と、解体的な軽快さ(私たちの生の、一千の放心的な無駄事と一千の馬鹿笑いとでできあがった軽快さ)の性格がこの炎を「私の外」に位置せしめていた。そして、舞踏においてすべてが混合されるように、その炎の中へおのれを焼尽しにやってこないような何ものもなかった。私はこの火床の中にとびこんだ。私という存在からこの火床以外のものは残りなかった。火床自身が、まるごと、自我の外への噴出であった。(ジョルジュ・バタイユ『内的体験』)

――あなたにとってエロティシズムとは何を表しているのですか。

――それは内的体験です。もちろん私は…ですがエロティシズムこそ、我々が瞬間のなかへ入って瞬間を生きることを可能にしてくれる最も強力な方途だと思えるのです。

――幸福な体験なのでしょうか。それとも不幸な体験なのでしょうか。

――もちろん、騒ぎの先頭に立っているのは快楽ですよ。しかしそれがいつも純然たる喜びに達するとは限りません。しばしばたいへん重苦しくなります。『エロスの涙』で私は、エロティシズムがもたらしうる果てしない辛さ、果てしない苦痛を考慮に入れています。

(ジョルジュ・バタイユ『純然たる幸福』)

わたしが男と女に望むことは、男は戦闘に長け、女は産むことに長けていることである。そして両性ともに、頭も足も舞踏に長けていることである。

一度も舞踏しなかった日は、失われた日と思うがよい。そして一つの哄笑をも引き起こさなかったような真理は、すべて贋ものと呼ばれるがいい。(ニーチェ『ツァラトゥストラ』)

『－鈴木さんに聞きたいのですが、鈴木さんアルトー訳していて、Corps-sans-organes って出てきたらなんて訳します。一応「器官なき身体」って訳語が定着してしまっているわけだけれど。

――うーん…。

――以前フランス人に聞いたことがあるのですが、その人はアルトーなんか知らない技術者なんですが、日本人がCorps-sans-organes ってフランス語で言ったらたぶんCorps inorganiqueと言おうとして間違えたと取るんじゃないかって言うんですね。つまり「無機物」という意味ですが、「無機物」と言おうとして間違えてそう言ってしまったんじゃないかって。つまり、Corps-sans-organesという言葉には「無機的」というニュアンスが実際上深くあって、アルトーもそれを意識していたのじゃないかと思うのですが。

「器官なき身体」って訳は、確かに他に訳しようがないのだけれど、日本語だとどうしてもなにかグニャグニャした有機的なニュアンスが強まってしまうでしょう。同じ理由で僕はラカンの幼児の身体を援用してこれを説明するのにも賛成しないんです。それもどこかアニミズムのイメージを容認してしまうでしょう。

――その対極に結局アルトーはつき抜けるよね。

――日本では最初からアルトーの「残酷」やCorps-sans-organesをそんな感じで了解しちゃった。土方巽さんや寺山修司さんとか、そうでしょう。あれはあれでいいけど、全然デカルト主義的じゃないしアルトー的ですらない。日本的なアニミズム的身体観の極限ではあるでしょうけど、舞踏の人たちと喋っているとCorps-sans-organesは完全にアニミズム化されてしまっている。

――アルトーが自分の肉体に抱いていた実在的なイマージュの次元というのは、いくつかあると思う。まず麻薬中毒の身体というものがもちろんあると思う。それはすごく苦しいものです。それに直腸癌で苦しんだでしょう。この二つは事実として絶対に欠かせないと思う。痛みあるいは痛み即存在みたいな次元に身体が同化する時の思考自体のいだく苦しみのようなもの、それに対してさらに「思考」がどんなふうに発動されるのか。それはアニミズムの領域には人を導かないでしょうね。究極的には肉体そのものである「思考」がまさに発せられるとき、アルトーは自分の身体を唾棄すべきものだと感じているのではないか。だから肉体礼賛とはぜんぜん違う。

――ぜんぜん違う。いわゆる肉体礼賛には決して行き着かない。だから、その…何と言っていいか難しいんですが、肉体と精神を巡る「第三の場」をどう捉えるのか、そして何故アルトーが、或いはドゥルーズがそうした場を提示したのか、その奇妙な極限を提示する必要があったのか、それが問題になると思うわけです。』

(丹生谷貴志『死者の挨拶で夜がはじまる』――序にかえて:〈聞き手〉鈴木創士)

イタリア未来派の例もあるが、二十世紀のアヴァンギャルドは、こうしたキャバレー、ヴァリエテと呼ばれる猥雑な身体文化がその基層に敷かれていたのである。バルは同人誌「ダダ」の中で、「われわれがダダと呼んでいるのは、虚無から生まれる阿呆な仕種、たとえば古代剣闘士の所作とか、みすぼらしい残滓物との戯れとか(中略)その虚無の中には高い次元の問題がすべてもつれこんでいる」と述べている。ダダという名称のように、それ自体なんの意味もなさないがゆえに「たいへん意味のある無意味」(ヒュルゼンベック)なのであった。

(國吉和子『夢の衣裳・記憶の壺』)

誘引作用(attirance)は、ブランショにとって、サドにとっての欲望、ニーチェにとっての力、アルトーにとっての思考の物質性、バタイユにとっての侵犯にあたるものにちがいない。純粋な「外」の体験、それもいちばんむき出しな体験である。…それは、いかなる魅惑にも支えられていず、いかなる孤独を破るものでもなく、いかなる実質的な伝達をうち建てるものでもない。引きつけられること、それは外部の誘引力(みりょく=attrait)によって誘われることではない、むしろそれは、空虚と無一物の状態の中で、外の現存を、そして、この現存と結びついているものだが、自分がどうしようもなく「外」の外にあるということを感じることなのだ。(ミシェル・フーコー『外の思考』)

(引用の訳文は訳者省略。ご了承ください。)

「祀盥」ではなかったか?といまでも疑っているのですが)は、矢野さんに導かれ一平と同行したのでした。(中西夏之さんにも　同じアドバイスをいただきましたが)。発見の会の若手、内山とか上杉とかの交流も矢野さんがいてはじまった。大綿蛇蝮の旗揚げのB全の金紙に刷ったポスター―も矢野さんの作品でした。(私の手元にはないこのポスター、腰さんの手元にはオリジナルがあるのだろうか?あれば、いまでも自分の部屋の天井にでも貼っておきたいような…希少なものです)。

鉄の原田クン、上原の名も懐かしい名前でした…。福井の山中まで矢野さんを引っ張り込んで、古い養蚕の民家を稽古場に改装してもらったのは、当時すでに矢野さんが伊豆の下田で古民家の改装・改築を手がけていたからでしたが、福井県・五太子村での数ヶ月の飯場生活(地元・越前海岸の船大工さんともいっしょの)、あんなに素晴らしい、懐かしい記憶はありません…(足立はなにをしているだろう?…次から次と…福井大学の何某や大谷さんや小野忠弘氏、江守クン、名を思い出せない手伝ってくれた若い連中の顔が浮かびます)。『背火』の旗揚げ公演のあとの、新人募集に奈良も現れたのでした。

駆け足の60～70年代、なぜあんなに捲き込み、捲き込まれるように走っていたのだろう…　終わらない「青春」というようなもの???

矢野さんの認知症の最後がとてもハッピーだったという道子さんの語りが聞けただけでほんとうに幸せな気分にさせられました。

『ゴールデン・スランバー』、道子さんの歌ごえまで聞けて涙です。(つい数年前に、ニューヨークのダンサーたちに操られた『溶鉱炉』という作品で、滅多なことでは使わないBeatlesの曲を、敢えて一曲と、Golden Slumbersを選曲したことも思い出しながら聴いていました。)

こうして書いていると、昨日はとどかなかった記憶まで、いま書いている言葉を追い越すようにして現れてくるのに失語してしまいます。

はじめて道子のお宅に泊めていただき、矢野さんの仕事場を見せてもらい、朝食をいただいたときの記憶。いっしょだったのは、多分一平でしょう。あんまり朝食の、道子さんの炊いたご飯が美味しかったので、「なんでこんなに美味しく炊けるのか?」と聞いた…「炊く前に1時間は水に浸けている」と教わったのを覚えています。でも、それは道子さんと話がしたい口実でした…今も思い出しながらその時の自分のハラハラした感情が鮮明によみがえる、そのことがまた、驚きでもあります。矢野さんへの嫉妬のようなものがあったのです。当時私は独りだった(井荻のガレージの上に住んでいたか、大森の稽古場の上にいたのか、洗足池近くにようやくひとりでアパートを借りた頃だったか)。

それから、仲人に立ってくれ、といつ、どのようにしてお願いしたのか…完全に記憶が脱落しています。彼女を伴って道子のお宅へ伺ったはずですが、思い出さない…。ただ、矢野さんが最初断った、俺たちが仲人して失敗した前例があるからやりたくない、と。「まあ不幸も幸福もなんぼのもんじゃ!」と言って説得したのか…会話だけは、かろうじて思い出しましたが。

そして、こうして離れ離れに、途切れ途切れに、記憶のかなたから、忘却のなかから思い出す作業は、すでに軽くて重い認知症にかかっている自分が喜びと悲しみとともに、未だにわけのわからない自分の肉体をなぞっているのだという、そういう〈陣痛〉のような、それが絶対に自分のとどくことのない己の〈死〉、〈外〉にあるものだということ…

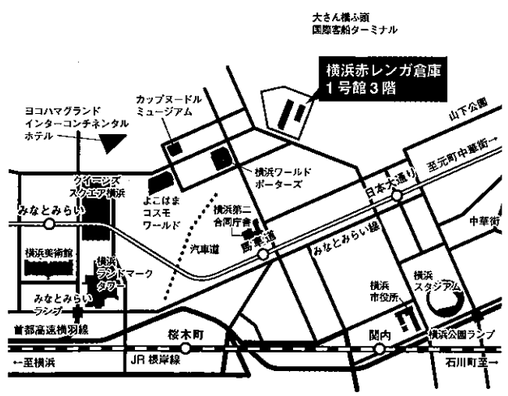
「肉筆で書いてください!」、パソコンで書くメールと手紙は別物ですよ、と言われていますが、…それはそうなのですが、
取り急ぎ、少し長くなりましたがメールで返信します。
くれぐれもお身体に気をつけて、お過ごしください。

11月のイヴェントには是非、お越しくださるよう、追ってご案内します。

それでは。
室伏鴻
(2013年 9月)

	12:00	13:00	14:00	15:00	16:00	17:00	18:00	19:00	20:00	21:00	22:00
19 tue								墓場で踊られる熱狂的なダンス」19:30～ 「瞬間の学校」のための新作			
20 wed		「ヒロシマ・モナムール」12:30～ 監督:アラン・レネ				Free Session 17:30～ *詳細はHPをご覧ください		「DEAD1」+「Still」19:00～ 振付:室伏鴻　目黒大路ソロ	「映像化されたダンスから 新しいダンスを開発する方法」20:10～ 大谷能生&木村覚		
21 thu						Free Session 17:30～ *詳細はHPをご覧ください		「縁にBlues 際でFunk」19:30～ 大谷能生+室伏鴻			
22 fri		「裁かるるジャンヌ」12:30～ 監督:カール・テオドア・ドライヤー				Free Session 17:30～ *中村蓉+コーランタン *岩渕貞太+ホルヘ・ペルナル+マキシモ・カストロ		「マヤ・デレンの白昼夢」18:40～ 石井達朗　*「午後の網目」他上映	「アルトー二人」20:20～ 芥正彦&室伏鴻		
23 sat		「石の賛美歌」12:30～ 監督:ミッシェル・クレイフィー		「棄民　国民　そして忘却」14:45～ 鴻英良&鵜飼哲		「リトルネロ-外の人,他のもの」17:30～ 室伏鴻ソロパフォーマンス		「デモンストレーションとしての『表現』」19:00～ 桜井圭介&三田格	呑むズ ライブ 20:40～ 演奏:呑むズ		
24 sun		「裏返し・踏み外しののダンス放談」 13:00～ 鈴木創士&丹生谷貴志	Free Session 14:30～ *詳細はHPをご覧ください	「リトルネロと外の身体」15:15～ 宇野邦一		[The Last News] 17:30～ 国際共同制作					

横浜赤レンガ倉庫1号館　アクセス



住所：横浜市中区新港1丁目一番　Tel 045-211-1555
JR・市営地下鉄「桜木町駅」より汽車道経由で徒歩約15分
JR・市営地下鉄「関内駅」より徒歩約15分
みなとみらい線「馬車道駅」または「日本大通り駅」より徒歩約6分
「みなとみらい駅」より徒歩約12分